

# 水の源

2011.9

14

M I Z U N O M I N A M O T O

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

## コンピュータを活用して 地域を元気に



東京工業大学監事  
西村 吉雄さん

ウォークルポ

高齢者・水源の里でこそ  
情報網の活用を

—FTTH網の完備と先駆的運用—

島根県奥出雲町

フォトストーリー

あめ はた すずり

雨畑硯 (山梨県南巨摩郡早川町雨畑)

山河の恵みに伝統の技を刻んで

水源の里発 おすすめご当地グルメ

岡山県 真庭市「ひるぜん焼そば」

佐賀県 多久市「岸川まんじゅう」



# 水源の里へ 思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。

「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちが

お互いの暮らしや環境を理解し、感謝し合っこそ実現します。

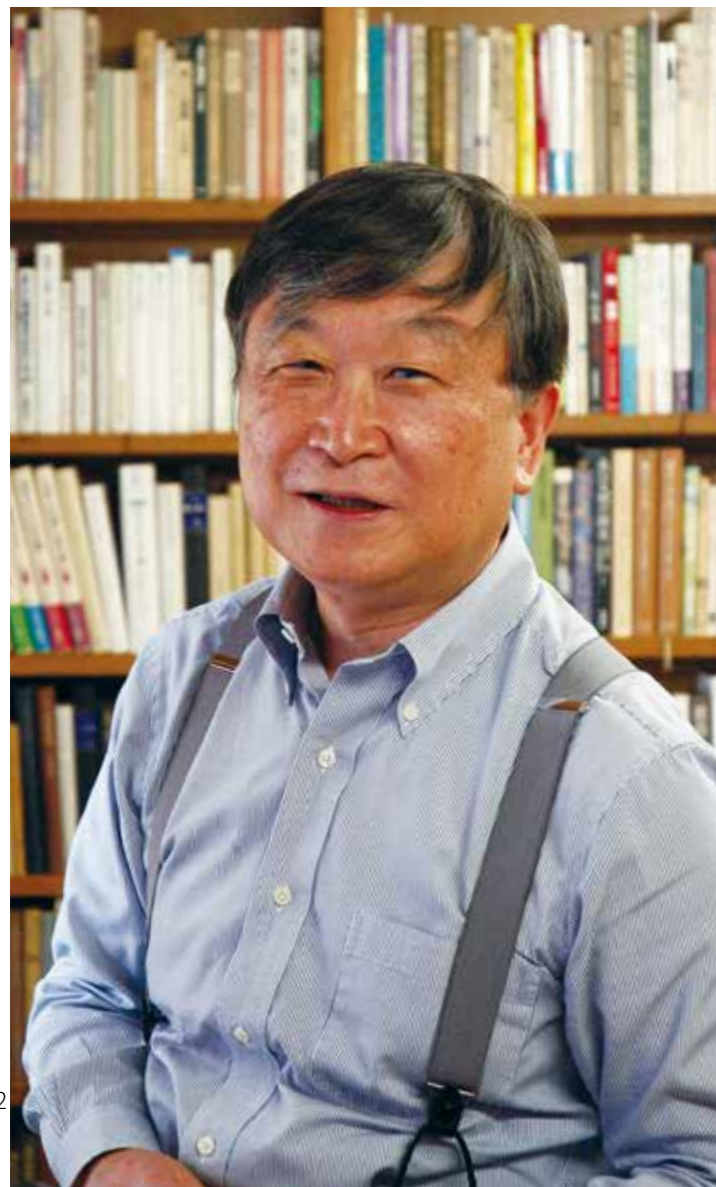
このコーナーでは、文化人・著名人に、そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。

聞き手 『水の源』編集長 町井 且昌

東京新宿区の西村吉雄さんの書斎にて

東京工業大学監事 **西村 吉雄**さん

## コンピュータを活用して 地域を元気に



以前から「農山村においてユビキタス\*が実現すれば、旧来の農村における生活上の不便さのほとんどが解消される」と指摘されながら、現実には、農山村の生活には情報化の恩恵が及んでいません。そこで、農山村におけるインターネットやコンピュータの可能性について、西村吉雄さんにお話をうかがいました。

※ユビキタス  
情報化社会において、コンピューティング技術が「いつでも」「どこにでも」存在し、コンピュータの存在をもち意識することなく利用できる、といった概念のこと。

西村 吉雄さん

東京工業大学電子工学科卒。工学博士。「日経エレクトロニクス」編集長を経て東京大学教授、大阪大学教授、早稲田大学客員教授を歴任。現在、東京工業大学監事。著書に「産学連携」「テクノロジー・ワンスモア」など。

—このところパソコンの世界にも新種の機種がどんどん現れて百花繚乱の気配ですね。

そうですね。マックのi-pad（アイパッド）が発売されてから、いろんな機種が出てきました。いずれもより使い勝手がいいものを目指しています。

—わたしのオヤジがパソコンに触り始めたのは90歳を超えてから。キーボードをポツポツ叩いて10冊近く本をものにしました。あの使い勝手の悪いキーボードで。（笑）やはりモノを書き残したいという意欲が背中を押したんでしょうね。

キーボードで文字入力する時代が長く続きましたから。i-padの出現は革命的だったと思います。指で画面に触れるだけでいいんですから。

でもそうするとキーボードが懐かしいなんて。

—ははは、勝手なもんですね。ところで今日は高齢者とパソコンについてお話をうかがおうと思います。高齢者がパソコンを使いこなして有名になったのは、〈葉っぱビジネス〉の徳島県上勝町ですね。

人口2千人の山間の小さな村。高齢化率が50%近くて。この町でいりどり〈彩事業〉と呼んでいるのは、紅葉、柿、南天、椿の葉っぱ、梅、桜、桃の花など料理にいろどりを添える〈つまもの〉を商品化して売っているんです。葉っぱは320種類もあるそうです。なぜこんなものが売れるかという、都会には季節感がないからです。食事をしながら季節感も楽しむというわけ。松葉や稲穂で作った祝膳用の飾り物や食用の山野草、食用花なんかを出荷しています。高級料亭などが得意先で、年間の売り上げが2億円を超えているようで立派なビジネスですね。

—それがまたどうしてパソコンと。

このビジネスは少量多品種の商品を適時に出荷しなくてはならないんです。だからどうしてもパソコンの力を借りたい。そのために上勝町の町長笠松和市さんは考えたんです。ひとつはパソコンそのものの改良。高齢者というのは若い人と同じようには機械が扱えない。例えば、マウスがうまく使えない。そこで専用のキーボードと大型のトラックボールを開発したんです。

—トラックボールとは？

大きなマウスの玉でしょうかね。それと数字のテンキーだけで出来たキーボードを特注して使い勝手を特段に改良したようですね。高齢者でも抵抗なく使えるようにした。それだけじゃないんです。彩事業のニュースやデータを毎日更新して利用者が見たくするような工夫をしたり、情報の価値を知ってもらうために、町民を対象に何回も講習をしたようですね。



パソコンの概念を大きく塗り替えた、マッキントッシュ社のi-pad



トラックボール  
上面についている球体（ボール）を手で回転させて、回転方向や速さに応じてカーソル（ポインタ）などを操作する。マウスのように装置そのものを持って動かすのではなく、指先や手のひら（機種によっては足にも対応）を使ってボールだけをその場で回転させることで操作する。用途やユーザーの状況に応じて、さまざまなデザインがある。

※ブラウザ  
一言でいうとインターネットをするためのソフト。日本における代表的なブラウザとしては、2011年現在で「Internet Explorer（インターネットエクスプローラー）」、「Safari（サファリ）」、「GoogleChrome（グーグルクローム）」、「Firefox（ファイアフォックス）」などがある。

——そういう工夫を重ねた成果ですね。

そして葉っぱビジネス専用の操作が簡単なブラウザ\*をパソコンに載せました。

さらに重要なのは、高齢者の皆さんにこれは面白いと好奇心を持ってもらうこと。例えば専用のブラウザから、自分の売上高や順位を見ることができるようになってきました。皆さんが面白いと感じる情報を毎日発信することが大事だと。

上勝町では国の補助金を活用して86%の家庭に光ファイバーが入っているそうです。そういう環境整備も進めたんです。

——高齢者の皆さんにとってパソコンがどうしても必要なツールになっているんですね。そういう仕組みを作ったんだ。画面が大きくなったというのもパソコンの使い勝手をよくしましたね。

24型の画面になればまあまあです。解像力は少し劣っても、大型の液晶テレビにつなぐと快適ですよ。私も学生を集めて講義するときには大型画面は絶対必要です。

今ではどんな過疎地でも大画面のテレビが普及しているので、パソコン画面を大型テレビに映し出すことはそんなに難しくありません。特に大容量の光ファイバー網が全国に張り巡らされてからは、通信過疎地というものが解消されてきましたから。全国どこでもパソコン環境は平等です。



モーツァルト専門のサイトを例に、インターネット・ラジオを実演

話は変わりますが、インターネットが普及してくると「電波よ、さようなら。インターネットよ、こんにちは。」の時代がもうそこまで来てるような気がします。インターネット・ラジオも広がりを見せています。ほくはアメリカのネットラジオをこの部屋で流しているんですよ。電波でないので何物にも妨げられず、音質がとてもいい。パロック音楽専門のラジオ局なんていうものもあります。

広告なんかも電波による媒体よりもインターネットを媒体にするものが増えてくるでしょうね。ネット文化はやはりアメリカが先行していると思います。

——私も本はもっぱらインターネットで買います。本屋さんで探す煩わしさがなくて、すぐ検索して、注文すると早い場合は、翌日には手に入ります。

そうした、ネット利用の必要性は高齢者にこそあると思います。特に一人暮らしの方なんか、遠くにいる家族との交信、村の中の情報交換、行政情報、オン・ライン・ショッピングなんか。心のネットワークの構築にも役立つはずですよ。

パソコン操作については、よりシンプルに改良されて、使いやすくなってきましたが、やはりパソコンを使おうという強い動機がないと長続きしません。子どもの様子を知りたいとか友人のご機嫌伺いをしたいとか、何かを知りたいとか。

——そうですね、パソコンをめったに開かないカミさんが、携帯メールには夢中ですから。メールを打ちたいという強い気持ちがあるんですね。上勝町の皆さんも知りたい情報があるから、パソコンを使いこなしておられるんでしょうね。要は強い動機だと。

せっかく操作を覚えても三日も経つと忘れてしまいます。またゼロからということになる。メールを送受信する、そのために文章を書く、インターネットを開く。これだけでもいいじゃないですか。毎日が楽しくなること請け合いです。

——高齢の方々にもパソコンの世界を大いに楽しんでもらいたいものですね。私は人生観が変わるほどの価値があると思います。



## インタビューを終えて

西村吉雄さんはフランス・モンペリエの大学の留学生仲間です。当時からITのエキスパートとして有名でした。今も第一線で活躍中。初夏の夜、内容の濃い話をうかがいました。

# Close-up

## 西村吉雄さんの書籍紹介

『情報産業論（改訂版）』は、2004年から08年まで放送大学で使われた教科書。名は厳めしいが、西村さん特有の平易な文章で書かれたネット社会を展望した入門書。



『情報産業論（改訂版）』  
（放送大学教育振興会刊・2,200円）

豊かな自然のなかで営まれる「水源の里」の暮らし。そこには、都会には無い魅力があふれる一方、都市部からは想像もつかない苦勞もあります。このコーナーでは、そうした「水源の里」ならではの課題や取り組みにスポットを当ててレポートします。

# 高齢者・水源の里でこそ 情報網の活用を —FTTH 網の完備と先駆的運用—

島根県奥出雲町

## 高齢者にインターネット？

島根県の東南端に位置する奥出雲町は、平成 17 年 3 月に旧仁多町と旧横田町の合併により誕生。中国山地の嶺を隔て広島県と鳥取県に接し、斐伊川の源流域に位置している。どことなく神秘的な雰囲気漂うこの地は、八岐大蛇退治や、素戔嗚尊の降臨などで知られる出雲神話発祥の地。

事前情報によると、奥出雲町では全戸に光ファイバー網が配備され、それを活用し、高齢者の生活をサポートする事業が展開されているという。

大阪の都心に生まれ育った私の周囲ですら、パソコンやインターネットを使いこなす高齢者はほとんど見かけず、むしろ敬遠している人が多いように感じる。そうした現状にあって、果たして中山間地域で高齢者がインターネット生活に馴染むのだろうか。あれこれ考えながら、のどかな田園風景のなかをクルマで走り抜け、奥出雲町の仁多庁舎に到着。総務課情報通信係の石原係長と中里主任にお話をうかがった。

大阪の都心に生まれ育った私の周囲ですら、パソコンやインターネットを使いこなす高齢者はほとんど見かけず、むしろ敬遠している人が多いように感じる。そうした現状にあって、果たして中山間地域で高齢者がインターネット生活に馴染むのだろうか。あれこれ考えながら、のどかな田園風景のなかをクルマで走り抜け、奥出雲町の仁多庁舎に到着。総務課情報通信係の石原係長と中里主任にお話をうかがった。



テレビ局外観（下）  
編集室（左）：ニュースを収録するスタジオもあり、撮影・編集作業もすべて町で行っている。



## 全国に先駆けた通信事業

奥出雲町は町村合併後、地域間格差の是正と均衡ある発展を目指すなかで、いち早く情報通信網の整備に着手。農林水産省の「元気な地域づくり交付金事業」交付金を得て、平成 17 年度から 19 年度の 3 か年で、町内全域に各家庭まで光ファイバーを導入する全国最先端の FTTH\* 網を完成させた。町が指揮を執り、町内全域にこのシステムを構築するのは全国で初めての取り組みとなった。

「FTTH 網の完備により超高速インターネット、ケーブルテレビ、IP 電話の利用ができるようになりました。それと同時にデジタル自主放送設備を完成させ、平成 20 年度からデジタル自主放送《ジョーホー奥出雲》を開始しています。町でケーブルテレビ局を持ち、自主制作番組も放送しています」。中里さんはさらりとおっしゃったが、それはとても先進的な取り組みである。町の住民は NHK や民放各局と並んで、「ジョーホー奥出雲」も視聴でき

る。番組の内容は、体操の講座から地域の行事紹介、町からのお知らせを文字で伝えるものまで様々だ。「町内のイベントや話題を扱った番組では、祖父母世代の方が家族や孫の顔をテレビ越しに観られると好評ですよ」と石原さん。町内だけの放送とはいえ、テレビという大衆的なメディアから見知った顔が見られるというのはさぞ嬉しいことだろう。

## FTTH 網を高齢者支援へ応用

FTTH 網の活用は通信やメディアだけにとどまらない。平成 20 年からは総務省の地域 ICT 利活用モデル事業に採択され、FTTH 網を利用した「高齢者等の安心・安全生活サポート事業」を実施。新たにテレビ電話による独居老人宅の見守りや生活支援サービスの構築を進めている。

事業を進めるにあたり、多機能テレビ電話端末「万事万端」を採用。タッチパネル方式のテレビ電話であり、簡単なパソコンのような機能を備えている。平成 21 年 1 月より運用が開始されたこの端末は、高齢者や独居世帯の自宅に約 700 台、高齢者からの情報を受け見守る公共施設などに約 150 台が設置されている。

## 奥出雲町はこんなまち

人口 15,812 人、面積 368.06km<sup>2</sup>、高齢者比率 34.27%。仁多米、仁多牛、奥出雲椎茸、奥出雲酒造、高糖度トマトなど、地域ブランド化による産業振興が盛ん。『古事記』『日本書紀』の出雲神話発祥の地であり、古くは「たたら」製鉄で栄えた。

しかし、このような端末の操作に不慣れなお年寄りが多く、利用してもらうにあたり根気強い普及活動が必要だった。「端末の使い方は、地域の民生委員が利用者宅を回り、何度も説明を繰り返しました。おかげで『毎日利用する』『ときどき利用する』という方が全体の約半数になりました」と、中里さんはうれしそうに語る。

テレビ電話本体：画面はタッチパネルになっており、使い方は一目瞭然となるような画面を表示させている。



\* FTTH…「Fiber To The Home (ファイバー・トゥ・ザ・ホーム)」の略称で、光ファイバーを一般個人宅へ直接引き込む網構成方式のこと。



### コミュニケーションを通して地域を見守る

では実際に、高齢者はどのようにこの端末を利用しているのか。主な用途としてはテレビ電話が中心だという。家族やご近所の方などと顔を見ながらの会話ができるのはもちろん、町内にはコールセンターが設置されており、3名のオペレーターが対応している。声掛けや、安否・体調の確認をはじめ、日常の問題を解決するための取り次ぎを行ったり、異常を感じ取った場合は民生委員と連携し、直接訪問したりもする。

端末のその他の機能としては、朝起きたときに画面をタッチすれば、登録してあるメールアドレスにその通知が届く「おはようタッチ」や、パソコンから写真を送ればそれがスライドショーのように画面に流れる「デジタルフォトフレーム」などの機能もある。

### 高齢者の安心をサポートする

現在の活用状況としては、地域の見守りが中心で、利用者の反応としては《あってよかった》という意見と、《なくてもよい》という意見が半々とのこと。「ただし、利用していただいている人のほとんどが、効果や機能に満足されており、大いに手応えを感じています」と、石原さん。機能面に関しては、血圧の管理やタッチパネルで買い物ができるなどさまざまな可

能性がある一方で、多機能になると操作も複雑になって使いづらく感じられるというリスクがある。そのバランスが難しいところで、現在もユーザーの声をできるだけ反映し、使いやすさを重視し改良を続けているそうだ。石原さんは続ける。「情報通信は距離や時間を短縮するツールでしかないので、本来の目的である高齢者の生活を支援するという視点を忘れてはいけません。そういう意味でも、日々、試行錯誤の連続で、まだハード面でもソフト面でも開発の途上ではあると思います。重要なのは、誰かとつながっているという安心感を持ってもらうことや、生活上での安全をできるだけ守りたいということです」。

現在の利用者の世代はもしかしたらパソコンはもとより、携帯電話も持たない世代かもしれない。デジタル機器自体に慣れていないというのは、ひとつ大きなハードルであることは間違いなさそうだ。しかし今後、パソコンなどを使い慣れた世代が高齢化していくにあたり、すでに町ぐるみでこのようなシステムが構築できているという意義は大きい。

安心安全だけでなく、さらに生活を便利にし、家族やご近所の絆を強めるツールとしての可能性を感じた。

【取材・文：阿藤夕可子】

**取材を終えて** 取材前は、「果たして、高齢者がインターネットに馴染んだ生活をしているのだろうか」という疑問があったが、取材を通じて、ユーザーの使い勝手や目的に合わせた端末が開発されていることを知った。「こうした端末は水源の里のみならず、都市部でも十分活用が可能では？」と一瞬思ったが、お互いの顔が分かってこそその安心感ということを考えると、地元のコールセンターや民生委員の存在など、ベースに《人のつながり》ができていいる農山村だから上手く機能しているのかもしれない」と思い直した。

## Photo Story フォトストーリー

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されています。このコーナーは、多くの先人たちによって継承されてきた匠の技を全国の皆さんにご紹介します。今回は、山梨県南巨摩郡早川町の硯工である望月玉泉さんを訪ね、お話をうかがいました。

### あめ はた すずり 雨畑硯

山梨県南巨摩郡早川町雨畑

## 山河の恵みに伝統の技を刻んで

### 「ヴィラ雨畑」は湖畔の宿

早朝の目覚めに、鶯など小鳥の囀りが迎えてくれる。まわりは山また山。静かだ。クーラーなど不要、盛夏の候なのに布団を被って寝ないと寒いぐらい。節電だ機器の温度調整だと騒いでいるのは、一体どこの国かと思われる。

この宿の敷地は、合併前の硯

島村の小・中学校の跡地で、校庭のそばには雨畑湖が迫っている。旧村の名に“硯”が入っていて、雨畑硯の長い歴史が偲ばれる。すぐ隣りが、硯の文化センターと云うべき「硯匠庵」。まさにこの宿は、すずりの里に憩いを添える「湖畔の宿」だった。しかし、公共交通機関はほとんどない……。

### 雨畑硯の原石はどこで採れるのか？

世に出廻る産物には、偽ものも少なくない。本ものを掘り出す坑口・坑道を確認めたいと申し出て、朝一番に「硯匠庵」の中心をなすお2人に案内された。ただし途中で中止となる。一人は硯匠である望月玉泉（本名、定

自己流で石を彫る望月さん。ノミを肩口に当てずに手の平で押す



のり徳)さん55歳。今一人は、町役場のOBの天野元さん62歳。曲がりくねった狭い林道をクルマで20分も登ると、そこから徒歩で対岸の山腹の坑口へ向うという。半信半疑で2人にサポートされながら、ケモノ道を岩石につかまり、手を握られながら、やっとのことで雨畑川の流れを見渡せる地点に下る。前日までの豪雨で濁り水が増水しており、対岸への渡渉は無理と判断され、ほっとした。

指さされた対岸の山腹には、小片のような青いトタン屋根と小さな黒い口がかすかに判別できる。望月さんは単身で坑内作業をし、掘り出した原石を判別し、良質な石片だけを20kgほどにまとめてかつぎ、山を降り川を渡り今一度こちらの山に戻って収石



坑道口  
(写真中央あたり)を遠望す

を果たす。坑口を遠望する彼の表情は厳しく、モノづくりの根源にふれたようで私も感動し黙した。

硯刻士 望月玉泉さんにたずねる  
雨畑硯の里 硯匠庵にて

望月さんは父・麗石<sup>れいせき</sup>さんを師とする二代目。戦後帰還を果たした父は、山の仕事に従事したり、庭石を扱ったりしていたが、30歳で硯づくりに専念し自己流を通し、世に認められた。専業でメシを食っていた時期もあったとのこと。望月さんも帰郷し、20歳から父の自己流を継承して



雨畑硯の原石  
(硯匠庵の地下に保管されている)

すでに35年。今では、県下でも数少なく、早川町で唯一人の現職技能者だ。後継者はいない。息子にはやらせたくないと言いきり、淋しい笑顔だった。

純朴でやや無口な望月さんだが、雨畑硯の秀でたところに話が及ぶと俄然、口なめらかとなり、ここには書き尽くせない。



望月さんの作品中、最もお気に入りの逸品



硯匠庵に勤務の天野元さん(早川町役場 O.B.)

硯匠庵に展示されている、昔ながらの工程ごとの使用道具



「<sup>ほうぼう</sup>鋒芒(ヤスリの目のような突起)が均等に入っていて、吸いつくようだ。重くて密度が高い。墨道(墨を摺る面)がへこまない。墨池(墨汁のため場)の水もちが良い。文字がざらつかずなめらかで、発色がよい」などなど。

磨き仕上げる工程も大切だが、望月さんにとって最も肝要なのは、粘板岩たる「原石を鑑<sup>み</sup>でデザインを思いうかべる」こと、つまりは完成品の構想力だとおっしゃる。この技は原石一つひとつと対決する熟練の鑑定で

あり、画一多量の機械生産とは全く異次元の世界だ。父の言葉「自分でみて、きれいなモノを造れ」にすべての想いと所作が凝縮されているとのことであった。

「硯匠庵」と天野元<sup>はじめ</sup>さん

早川町役場を退職後この庵に就職した天野さんは、肩書きも役職名もない名刺を出して、「半ボランティアですわ……」と苦笑される。多数のスタッフを抱えていれば、事務局長というべき役

割なのだろう。他に女性スタッフ1名。勿論、望月玉泉さんの工房も、この庵の<sup>いっかく</sup>一画を占めている。

平屋建てで小じんまりと瀟洒<sup>しょうしゃ</sup>なこの庵は、山梨県の肝煎<sup>きまじり</sup>で創建されて今年で12年。今は町営となつて、雨畑硯の伝承館にとどまらず、他産地の硯、墨、毛筆、和紙なども納められて、書の館としても風雅を演出している。

天野さんによれば、雨畑硯の歴史は長く、起源は諸説あつても、700年前から地元の石を掘り出し、この地の硯匠・硯工が伝えて来た……と。ここには伝統の灯と誇りが生きている。

望月さん指導による硯の磨き体験者も含め、年間入庵者は約

2,000人。大量かつ安価な物品のあふれる時世にあって、書と硯という地味な世界と雨畑の山間の奥深い立地を考慮すると、この人数はどう評価すればよいのか。「採算だけでなく、文化を遺す。雨畑硯は日本一と自負している!」。天野さんの決然とした声が低く響いた。

### 山村の伝統文化・モノづくりにもっと光を

硯匠庵では、県での書道大会とタイアップしたり、雨畑以外の硯の修理も受けている。しかし、雨畑地区は250人ほどの住人が9集落に分散しており、早川町もわずか1,200人余の人口規模だ。より大規模な理解と支援が求められる。例えば、官費の研習生を1人でも2人でもよい、現地に定住させられないものだろうか。雨畑原石は、機械にかけるとヒビが入る。採り置きして半年もすると、粘りが消え彫りにくくなる——この原石は生きているのだ。人の技



濃い緑の中の硯匠庵

と熱意が求められている。

ところで、望月・天野の二人は免許持ちの猟師だと聞いて、びっくりした。イノシシ、シカに加えクマも撃つのが楽しみだと。しかし驚くには当たるまい。この国の奥深い山村では、かつて焼畑農業、林業、鉄砲打ちなどでなんとか命をつないできた。昔の生活に戻って、硯を作

り続ける手もあるなどと3人で談笑しあった。林業の再興が最ももたれる現実策だろうか。

先端技術文明はグローバル、文化はローカル。山村の伝統文化・技能をないがしろにし続けるなら、多様な生活は画一化の波に埋没する。雨畑硯も生き延びて欲しいと祈る。

【取材・文：坂根千代忠】

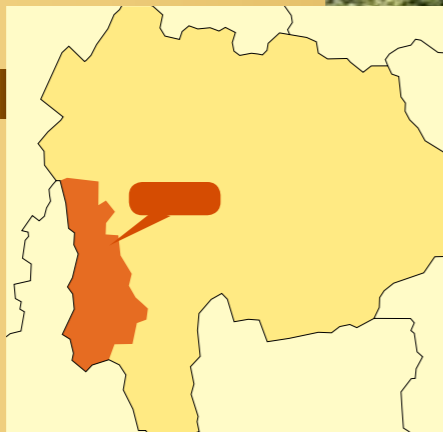


硯匠庵からはるか山腹の集落を望む

### 早川町

面積：約370km<sup>2</sup>  
世帯数：695世帯  
人口：1,268人

町としては日本一少ない人口。南アルプスの山々に抱かれているので、山好きな人には、登山、トレッキング、温泉と魅力いっぱい。



## ひるぜん焼そば

550円～

### まにわ 岡山県 真庭市

自然豊かな<sup>ひるぜん</sup>蒜山高原や湯原温泉郷など、岡山県を代表する観光スポットを有する真庭市。この市が誇るご当地グルメと言え、焼き麺の日本一を決める「小倉 BQ 食 KING 天下分け麺の戦い」で総合優勝、さらにB級ご当地グルメの祭典「第5回 B-1 グランプリ in 厚木」において初出場ながらシルバーグランプリ（準優勝）に選ばれ、一躍全国にその名を轟かせた「ひるぜん焼そば」です。

蒜山地域で50年来愛され続けてきたこの焼そばは、保存食だった味噌をベースに考えられたタレと、どこの畑でも採れるキャベツ、卵を産まなくなった廃鶏の肉を使い、先人達の創意工夫から生みだされた蒜山のソウルフードなのです。

鉄板からジュージュウ鳴り響くシズルと、立ち上る香ばしい煙に包まれ食欲は最高潮。五感を刺激され、思わず口中に溢れる唾液をゴクリ。フウ～フウ～してバクリ。なにコレ、普段のソース焼きそばと全然違う! 「ひるぜん焼そば」のカギとなる「秘伝の特製タレ」は、んにくの香りが心地よく鼻から抜け、フルーティな甘味の中にスパイシーな辛味がピリリと効いて……焼肉のタレと田楽味噌を合わせてスパイスを足したような……う～ん、とにかく言いようのないウマさ!!

この甘味と辛味が絶妙なバランスの濃厚な秘伝ダレが、コシのある「モチリ麺」、噛めば噛むほど旨味が染み出るジュシーな「親鶏のかしわ肉」、シャキシャキの歯ごたえがたまらない「高原キャベツ」としっかり絡み合せて、もうヤミツキ!! これはまさに焼きそばの革命です。

なお、商品は真庭市蒜山地域の「ひるぜん焼そば好いとん会」加盟10店舗で味わえます。それぞれのお店でタレを工夫していますので、ぜひいろんなお店の味を食べ比べてみてください。

【取材・文】白波瀬聡美



↑  
ひるぜん焼そばの味が家庭でも気軽に楽しめる「好いとん会」オリジナルの「ひるぜん焼そばのたれ(360円)」。タレの販売は地元加盟店舗のみで、1本につき10円の売上金が真庭市に寄付されています。  
※通信販売も行っています。詳しくは事務局にお問い合わせください。

水源の里 発

おすすめ ぶ当地 グルメ



↑  
ひるぜん焼そばで地域を元気にしようと活動するまちおこし団体「ひるぜん焼そば好いとん会」の加盟店は、こののぼりが目印です。

【お問い合わせ】  
ひるぜん焼そば好いとん会事務局 (蒜山観光協会内)  
〒717-0503  
岡山県真庭市蒜山富山根 303-1  
TEL 0867-66-3220  
FAX 0867-66-4141

水源の里  
発

おすすめ  
び当地  
グルメ



岸川まんじゅう あんなし 80円～

佐賀県 多久市

多久市は佐賀県のほぼ中央に位置し、北に天山、西に八幡岳、南に鬼の鼻山、東に両子山と四方を自然豊かな山々に囲まれた盆地で、市内を有明海に注ぐ牛津川が流れています。ここのおすすめご当地グルメは、岸川地区に古くから伝わる酒饅頭「岸川まんじゅう」。江戸時代の文献にも登場したとされるほど、歴史のある知る人ぞ知る逸品です。

元々は、田植え時のお土産や子どものおやつとして各家庭で手作りされていた伝統の味を「森上商店」が商品化。瞬間に口コミで評判となり、今では全国にファンを持つ人気商品になりました。

基本的な材料は小麦粉・砂糖・塩などいたってシンプルですが、添加物を一切使用せず、酒だけで発酵させる昔ながらの製法を守り続けて作られる「岸川まんじゅう」。酒種の良し悪しで、生地の膨らみ方や味が左右されるので、その日のコンディションで駄目な酒種は作り直すとこのこだわりぶり。シンプルゆえに掛ける手間ひまがものを言う、ごまかしのきかない味なのです。

愛情がたっぷり詰まったお饅頭(あんなし)をじっくり噛みしめていただきます。フカフカの生地を二つに割ると、お酒のほのかな香りがふんわり漂い、そのまま引っ張るとすごい引き。口に入れると、しつ

とりして噛めば噛むほどモチリとした弾力があり、自然な甘味が広がります。優しくどこか懐かしい素朴な味わいに思わず笑顔。直径は12～13cmもあり、大きくて食べ応え十分！ お腹も心も満たされる美味しさです。

定番のあんなし、あん入り他、よもぎや黒糖、石垣や高菜などバラエティ豊かな10種類の味が楽しめます。なお、午後は商品が売切れることが多いので、お店へ買いに行く際は早め！ 電話注文で全国への発送もしてくれます。【取材・文】白波瀬聡美



↑  
土日ともなれば1日1000個が完売する。もっとも量産したくても、体力や手間ひまを考えるとこれが精一杯なのだそう。

【お問い合わせ】

森上商店  
〒846-0003  
佐賀県多久市北多久町大字多久原4529-1  
TEL 0952-74-3848  
FAX 0952-74-3838  
営業時間：  
08:00～18:00  
(月曜定休)

ひとつひとつ不揃いなカタチも手作りの味わい深さ。生地の粘りと弾力が最大の特徴で、中のあんも甘さ控えめで美味しいと好評。



協議会だより

インフォメーション

第5回全国水源の里シンポジウム開催  
水源林の保全～森林の相続と売買～

国連は、2011年を「国際森林年」と定め、森林を未来の世代に残すため、持続的に森林保全・開発していくことの必要性を訴えています。

これを受け、全国水源の里連絡協議会では、下記の内容で「第5回全国水源の里シンポジウム」を開催します。全国から多くのご参加をお待ちしています。

日時 平成23年10月26日(水)、27日(木)

会場 ホテル金水苑「光彩の間」  
大分県佐伯市駅前2丁目4番13号

1日目

10月26日(水) 13:00～17:10  
《シンポジウム》

●基調講演

テーマ：「日本の水源林の危機」  
講師：東京財団政策研究部 吉原祥子さん

●パネルディスカッション

テーマ：「水源林を守る」  
【コーディネーター】  
遠藤日雄さん/鹿児島大学農学部教授

【パネリスト】

戸高壽生さん(佐伯広域森林組合)、足立紀彦さん(大分県農林水産部)、後藤國利さん(山林所有者)、長瀬一己さん(北川漁業協同組合)、吉原祥子さん(東京財団)

●第3回全国水源の里フォトコンテスト表彰式

同時開催

・全国水源の里フォトコンテスト入賞作品展示  
・佐伯市特産品市

2日目

10月27日(木) 9:00～14:00  
《現地視察》

山辺コース…ジビエ料理商品開発、超大型国産材製材工場、里の駅「大水車の郷」  
海辺コース…水産物処理加工施設、空の地蔵尊、さいきの茶の間(青山地区)

■お問い合わせは、全国水源の里連絡協議会事務局まで

お問い合わせ  
ご連絡先は

〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地(上林いきいきセンター)  
綾部市水源の里・地域振興課  
TEL 0773-54-0095 FAX 0773-54-0096 E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp

▲全国水源の里連絡協議会 事務局

佐伯市役所 企画商工観光部 企画課総合政策係  
住所：〒876-8585 大分県佐伯市中村南町1番1号  
TEL：0972-22-3486(直通) FAX：0972-22-3124  
E-mail：s-suigen@city.saiki.lg.jp  
http://www.suigenosato.com/index.htm

全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」の理念のもと、全国に連帯の輪を広げ、水源の里の振興を図るため、全国の会員市町村に募金箱を設置し募金活動を実施しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくために、ぜひ募金にご協力ください。

編集部  
より

読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施します。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。

アンケートにお答えいただいた皆様の中から、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「ひるぜん焼そばのたれ」か「岸川まんじゅう」を各3名様にプレゼントします。(賞品の指定はできません。)



官製はがきに、①『水の源』の誌面で面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見を記載し、住所、氏名、年齢、職業、性別、電話番号を明記の上、下記宛先までご応募ください。

※アンケートの回答のない方は無効となります。  
※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。  
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

応募先：下記連絡先、『水の源』読者アンケート係まで  
締切：平成23年10月14日(金) 消印有効

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。  
年間購読料：1,000円(年4回発行)  
お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで



上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

# 第5回 全国水源の里 シンポジウム

## 水源林の保全 ～森林の相続と売買～

平成23年

**10月26日(水)**

《シンポジウム》13:00～17:10

ホテル金水苑(大分県佐伯市)

**10月27日(木)**

《現地視察》9:00～14:00

大分県佐伯市本匠

### 私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長	玉川福和
全国農業協同組合連合会・代表理事理事長	成清一臣
全国森林組合連合会・代表理事会長	林 正博
電気事業連合会・会長	八木 誠
独立行政法人 水資源機構・理事長	青山俊樹
社団法人全国浄化槽団体連合会・会長	上山健治郎
社団法人全国清涼飲料工業会・会長	前田 仁
社団法人大分県薬剤師会・会長	安東哲也

(敬称略)

## 水の源 第14号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成23年9月

編集：「水の源」編集委員会